

1 有明ボート

昔の百道海岸は、現在人口海浜に変わってしまっているが、砂浜に数十軒の海の家が軒を連ねていたことを覚えておられる方もあると思う。海の家とは、つまり、海水浴客の脱衣場と休憩所を兼ねた施設である。

その海の家の一軒が、「有明ボート」である。九州派結成の翌年の 1958 年の読売アンデパンダン展に出品した、九州派会員の作品の大半がここで制作されたと思われる。

筆者は、昨年初夏九州派初期の最も若い会員であった、鋤取稔氏と約 40 年ぶりに再会し、旧交を温めたのであるが、彼の御父君が経営されていたのが、「有明ボート」である。当時貸ボート屋を営んでおられ、毎年夏の海水浴シーズンのみ、海の家を開かれていたのである。従って、毎年秋から翌年 6 月まで海の家を閉じられていたのである。

どのような経緯で、九州派会員の作品制作のアトリエとして借用することとなったのか、当の鋤取稔氏に尋ねても、その事情は覚えていないということである。これは推測にしかすぎないが、九州派の会合で、鋤取氏の御父君が海の家を営んでおられ、夏季以外は使われていないことを知り、恰好の制作場所と思った会員の誰かが、稔氏を通じ、御父君鋤取十三郎氏に相談の上、拝借したものと思われる。稔氏の話では、会員殆どが大作のため、「有明ボート」一軒では足りず、近隣の 1.2 軒も借りていたとのことであるが、これも稔氏の御父君の御尽力によるものであったと思われる。

制作の場として、広い空間が確保できたということは、九州派初期の大作主義、共同制作、制作のスピードアップ等にどれ程の強力なバックアップであったかは、計り知れないものがあると思う。私ごとになるが、筆者の読売アンデパンダン出品作品である、コーヒーの麻袋を継ぎ合わせた、三千号の「東洋」も制作場所としてのこの台空間なしには不可能であったであろう。

鋤取十三郎氏の全くの御厚情によるものか、筆者の知る限り、一円の借り料も払っていないと思われる。氏は、既に 30 年前に他界されている。天上の鋤取十三郎氏に、深甚な謝意を捧げ、ご冥福を祈るものである。